
ミストとシェタ

仕神けいた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミストとシエタ

【Nコード】

N9102A

【作者名】

仕神けいた

【あらすじ】

いつの頃からか、ミストとシエタは旅に出た。世界を見るわけでもなくて、目的があるわけでもなくて。

白い世界01

どこまでも白い世界だ。

ずうっと遠くまで見ようと、オレはつま先立ちをしてみる。

いや、つま先立ちなんてホントならできないんだけども。したところで、オレの視界が広がるわけでもなし。けれど、相棒がつけてくれたせっかくのイメージ体機能だ、活用しなきゃ恨まれる。

ユーレイのオレが恨まれるってのも、おかしい話だ。

オレはイメージだけでもつま先立ちさせてみた。

やっぱり白い。

あんまりにも白すぎるから、どこまでが地面で、どこからが空なのかさっぱりわからない。

「なあミスト、ここってドコなんだろうな？」

オレは相棒に聞いてみた。応えてくれるかな？

だって、オレの相棒、いつも無口で無表情だから。オレが質問したところで、応えてくれたこともほとんどない。

そんなだから、何考えてるのかなんて、普通のヒトじゃ絶対わからない。

オレもよくわかってないんだろうけど。

今だって、オレの隣でぼうっ……と突っ立って、風にあおがれるままになってる。何を考えているのだろう。

オレと出会わなけりゃ、今頃、相棒はどうやって旅をしてたんだろうな。

「……………」

やっぱり応えてくれない。つか、オレの質問、この白い風に吸い取られて、相棒に聞こえてなかったのかも。

「ミスト——」

言いかけて、オレは黙った。

相棒は、こうやって景色を見るのが好きなんだった。

たとえ、真っ白な世界だとしても、じつと遠くまで見つめて、心にとどめているんだ。

オレはいったん俯いて、また視線を真っ直ぐに戻した。
相棒と同じものをじつと見ていた。

白い世界02

どのくらい時間が経ったのだろう。

5分？

30分？

とにかく、オレにとっては結構長い時間が過ぎた。

「……ここは、とても寒いところだね」

ふいに、相棒の声が聞こえてくる。

空気が透き通った声。だけど、はっきり聞こえる。

「サム、イ？」

オレはオウム返しに訊く。

初めてこの風の音が邪魔だなと思った。

「サムイって……確か、カタナとか、チョンマゲとか、ハラキリとかの？」

以前、話をしてくれた老人を思い出し、カタナで物を切る動きを真似してみる。けれど、相棒は首を横に振って、ゆっくりと白い世界に手を伸ばす。相棒の腕は、あつという間に白く包まれてしまった。

「違うよ、シエタ。寒いっていうのは、気温がとても低いのを感じることさ」

ミストの言葉に、オレは首をかしげる。

「それが”サムイ”ってこと？」

相棒はこくん、と頷く。

「……オレにはよくわかんないけど……そうか、これがサムイってことなんだな！」

オレは両腕をいっぱい広げて、白い風をたくさん身体にぶつけさせた。とはいっても、今のオレはイメージ体だから、全部すり抜けていっっちゃうけど。

相棒は、この白いのは『雪』だと教えてくれた。

一つ一つはすぐに消えてしまう小さな結晶で、だけど、たくさん集まれば、ふわふわの冷たい綿帽子になるって。

ついでに言えば、この雪のせいで道に迷ってしまったらしい。

白い世界03

「シエタ、行こうか」

オレに言つて、それからくしゃみをひとつ。

「だけど、オレ今動けないじゃん。オレの足——タイヤだけどさ、雪に埋もれちゃってるし」

そうそう、今のオレは面白半分で、壊れかけたジープにとり憑いている。オレがミストの代わりに運転しているようなもんだ。

それでも相棒は、深い足跡を残しながらジープに乗り込む。

「行こう。ここは私たちを歓迎してくれるものが何ひとつない」

相棒は、かじかんだ手で何度もキーを回してエンジンを温めようとする。

しょうがないなあ。

「相棒、この雪が止まらないとオレが動かすのは無理だよ」

オレは、助手席に座って相棒を覗き込む。相棒がキーを回すのに合わせて、かかりそうでかからないエンジン音が車内に響く。

「トランクに携帯用のヒーターと毛布、あっただろ？ それつけて、雪が止むまで毛布にでもくるまっておきなよ」

「……」

「とにかく車に乗ってれば、雪と風は避けられるだろ？」

「……」

オレが提案してるのに、無視してキーをまわし続けてる。

「……」 はあ、こんなに気温が低くて寒くて、相棒は手がかじかじ。こんな中を走ったら、間違いなく崖から落ちるだろうなあ

……

はあ、オレの未来はスクラップで終わるのかあ……」

「縁起でもない」

そう言っただけ、オレが隣で深いふかあゝいたため息をつくとき、エンジンをかけようとする相棒の手が止まった。

そして、トランクから布を引きずり出す音が聞こえ出す。

急いで運転席に戻って、真っ白になった服の雪を払い落とす相棒。
オレはにこつと笑みがこぼれた。

「きつとすぐ止むよ」

「……だと、いいな」

そう言ったきり、ミストは助手席に一枚毛布をかけ、自分も毛布
にくるまって静かに目を閉じた。

あたり一面、どこまでも白だった。

雨街道

「『この先、雨の道』……なんだこりゃ？」

ミストとオレ、シエタは『雨街道』と書かれた道案内を見つめる。
「すげえなミスト。この道、別名『涙の集う道』だつてさ」

オレの横で仏頂面している相棒、ミスト。いつも何考えてるかわかんないけど、でも、ほかの誰よりもオレの方が理解はある。その自信もある。根拠は……ない。

で、その相棒は、どうやらこの雨街道に興味が出てきたみたいだ。
「何かおもしろそうだな。」

乗りなよミスト。行ってみようぜ！」

「……ああ」

オレたちは、看板の示す道を走り出した。
しとしと雨が降り止まない道はぬかるんでいて、オレにとっては最悪の道だ。

適当な道の脇に停まってしばらく、雨が止まないか待ってみた。
でも、ここは雨街道。期待するだけ無駄だった。

するとミストは、急にエンジンを止めて外に出る。

「おい、濡れるぞ」

オレは傘を見つけて渡そうとするが、ミストは受け付けない。

「？」

「この雨に触れると、涙の理由がよくわかる」

「????」

「涙は悲しい時だけのものではないんだ……ここにきて改めてわかったよ」

天を仰ぐミストは、雨に濡れてキラキラして、少し、オレにも少しだけ、胸のあたりがあつたかくなるのがわかった。

「オレも！」

オレとミストは、やさしい雨にしとしとと濡れていくのを、ゆっ

くりと感^じることにした。

このまま、ミストとずっと雨を感じるのもいいなと思った。

思い流れる村

今日は珍しい日だと思う。

いや、だってさ、いつものミストじゃないから。

運転をオレに任せて、自分は助手席で窓の外を見る。

ずっとボーっとしてるんだ。

絶対おかしいって。

「ミスト、なに見てるんだ？」

「……」

反応なし。

これはいつもと同じなんだけれど、でも何か違う。

ああ、こういうとき、相棒がなに考えてるかわかる魔法とかな
いかなあ。

「おっ」

ふと見えた、荒れた丘の少し手前に家の群れを見つけた。

ラッキー。

そろそろ、燃料や食料を追加しようと思っていたから助かった。

「なあ、ミスト。向こうに村があるみたいだ。寄ってもいいだろ？」

「ん？」

オレは、相棒のそっけない返事を待たずにハンドルを切った。

そこは、あまり大きくないけれど、石造りの家々が並んだ、珍しい村だった。

家の造りが珍しいんじゃないかと、その村のとあるものが珍しかった。

「なんだ、これ？」

ぶかぶかと、ゆっくりとした動きでシャボン玉がたくさん飛んでいる。

大小の差が多少はあるけれど、手のひら大で虹色のきれいなシャボン玉だ。

シャボン玉は、屋根の向こうへ飛んでいく一部を除いて、ほとんどが壁を通り抜けて家の中へと入っていった。

と、オレの前を一つのシャボン玉がふわふわと通る。

「なんでこんなにシャボン玉が——」

オレが触ろうとしたとき、

「こらーあ！」

後ろからいきなり怒鳴られた。

「それに触っちゃだめー！」

振り返れば、すごい形相で女の子が駆けてくる。勢いでオレに追突するつもりだったみたいだけど、イメージ体だったオレをすり抜けてこけてしまった。

「いったたた………あ、あんたたち、旅人でしょ？」

女の子は、すりむいた鼻を撫でながらオレたちを睨む。

「そうだけど。お前、大丈夫か？」

「へーきよ、こんくらい。」

それより、この『思い玉』に触っちゃいけないのよ！ 他の旅人から聞いたことないの、『思いを形にする村』って？」

負けん気の強い子だなあ。

オレも、腕組みした彼女に負けないように、仁王立ちで言い返す。

「聞いたことないね！ だいたい、ここに来る途中、誰ともすれ違わなかったんだから知りようもないだろ！」

「なによ、生意気な子ねー」

「お前だつて——」

オレがさらに言い返してやろうとしたのに、それを遮って相棒が女の子の前に立った。

「思いを形にできる村なのかい、ここは？」

「え？ ええ……はい、そうです」

なんだこいつ。急にしおらしくなって、敬語になっちゃって。オレの時は噛み付きそうな勢いだったくせに。

相棒も、すっかり興味を持ちちゃったみたいだ。

「どうやって思いを形にするのか、もつとよく知りたい。よかつたら教えてくれないか」

ミストの頼みに、女の子は二つ返事で答えた。

まあ、いいか。

ミスト、元気なかつたみたいだから、これでちよつとは元気になれるだろうし。

オレとミストは女の子の案内で、村にいくつかある井戸の一つを訪れた。

そばに置いてあつた小さな桶に、なみなみと井戸水を注ぐ。

「この水が、思いを包んで相手のところまで流れていくの。届けたい相手と思いを浮かべながら、こうやって指先で触れるの」

言いながら、女の子が人差し指で水面に波紋をつくると、その中央からゆっくりとあのシャボン玉が浮かび上がった。

「うわあ、おもしろー」

「思い玉は、頭とか肩に当たっても割れないんだけど、指先に触れるとたちまち割れて、その場で思いがあふれてしまうの」

思い玉が、ミストの前でふわふわと八の字を描いている。

「相手まで届くと、こうやって八の字に動いて、指先が触れるのを待っているの」

女の子は、ミストに「触れてみて」と促した。

言う通りにミストが人差し指を出すと、思い玉はパチンと割れて、ミストはちよつと楽しそうに笑った。

「なんだ、どうしたんだよミスト？」

「いや、なんでもない」

だけど、顔はなんでもなさそうに笑ってるぞ。

「なんだよー。思い玉はなんて言つてたんだよ？」

「思い玉の運ぶ思いは、割った人にしか聞こえないの。それに、大切な思いほど壊れやすく、ゆっくりと流れるの」

「だから、さつきシエタが触ろうとしたのを止めたんだね」

「だって、思い玉を流す時間に、人が外を歩いてとは思わなかつ

「だから」

女の子は、開けっ放しにした窓の家を指して、慌てて窓から飛び出してきたと恥ずかしそうに言った。

まだしばらくは、村中の思い玉が流れるみたいだから、オレとミストは女の子の家で一休みさせてもらうことにした。

ミストは思い玉を眺めて、なんだか楽しそうだ。

よかった。

あのまま、ミストが元気をなくしていったらどうしようか、なんて思った。

もう心配いらないみたいだ。

オレも、思い玉がゆっくり流れるのをミストと一緒に眺めた。

「なあなあ。あの子、どんな思いを流してたんだろうな？」

ミストはあの子からどんな思いをもらったんだ？」

食料と燃料も調達し、村を出たところでオレは尋ねた。

「シエタ、他人の秘密事に首をつっこんじゃだめだよ」

「ええー？　なんだよ、つまんねー」

「あの村の人々は、思い玉で相手の気持ちを知ってから接する。それがいい事だと思い、僕も、相手を知る最善の方法だとは思ってるけれど——」

「けれど？」

「あの思い玉が、もしもなくなってしまったとき、村人はどうするだろうか？」

それに、これからの僕らにそれは必要かな？」

「でも……せつかく、ミストの気晴らしになるかと思って寄り道してみたのに……」

「シエタ」

「ん？」

ミストの方を見ようとすると、目の前にシャボン玉が現れた。

「わっ？ これって……思い玉？」

「食料調達のついでにもらってきた」

言って、ミストは水筒に入った水を見せてくれた。

「触ってごらん」

「う、うん」

オレは、ちよつときどきしながら、指先を玉に軽く当てる。

触れたか触れないかのところで、玉は簡単にはじけ、ミストの優しい声がオレの耳に入ってくる。

あの、優しい声が。

「……シエタ？」

しばらくして、ミストが動かなくなったオレに揺さぶりをかけた。オレはふと我に返って、運転しているミストを見る。けど、顔が思ったより近かったから慌ててイメージ体を消した。

「どうした、シエタ？」

「あ、ああ……あんなこつ恥ずかしいコト、よく言えるな！」

声が裏返ってる。やばい。相棒の顔をまともに見れなくなった。

相棒は不思議そうな声をする。

「恥ずかしいって……普通に言ってるだけなのに」

「ミ、ミストはもっと、こう、つつけんどんに言っのが普通だ！」

もついい！ オレは次の休憩まで顔出さないからな！ それまで呼ぶなよ！」

「はいはい」

「返事すんなよ！ 無視してていいって！」

荒れ野の一本道。

オレとミストは旅を続ける。

今日、相棒が何を考えてるか知りたいなんて思ったけど、全部わかつちやうと、結構恥ずかしいもんだな。

思い玉は、言葉じゃなくて、思いそのものを伝えてくれるものだった。えっと、相手の声は聞こえるんだけど、言葉じゃなくって――

！。

本当だって。気持ちそのまんまだったんだ。

だからオレは、相棒が考えてることを知りたいなんて思うのはやめることにした。

その分、オレが相棒のことを考えていればいいんだから。

星の宿

「見てごらん。今夜は星がよく見える」

「んー？ あ、ホントだ、星だらけっ！！」

寝転がった相棒のミストに言われて、オレ、シエタも空を仰いだ。

「こーゆーのをさ、『マウンテンのホシゾラ』って言うんだろ？」

オレって物知り。

「『満天の星空』」

相棒の方が、まあ、オレより物知りだけど。ちょびっとだけな。

「——なあ、あの星、赤くてすごい目立ってる」

一個だけ、真っ赤な星を見つけたオレは指をさす。

「ああ……あれは——」

ミストは、休ませていた身体を起こす。

ここは小高い丘の上。

丈の低い草がよく茂って、一休みにはちょうどいいって相棒が言ってた場所だ。

今はもう陽は落ちて、星の光だけが頼りの世界に変わっている。

草も。道も。土も。そして、オレとミストも。

「なんであんなに赤いんだ？　なあ、ミスト？」

オレは、あの星のことが知りたくて、オレよりちょびつと物知りのミストに訊ねる。

相棒、オレの顔を見てちょっと笑いやがった。
でも、全然嫌じゃないから許す。

「あの星の土が赤いからさ。鉄の錆のようなものが多く含まれている」

「へえー。」

オレはてつきりあの星が燃えているのかと思った」

スゲーな。おもしろいな。

オレたち、あの星の土の色見てるんだ。

でも、ま、手を伸ばしたら届きそうな近さだから土の色がわかって当たり前か。

「そのうちあの星に行つて、小瓶に土をいれようぜ、ミスト」

その提案に、ミストのやつ、また笑ったんだ。

オレのこと、やっぱりおもしろいだって。

「今のうちによく見ておいたほうがいい。ここまで近づくことは滅多にないから」

「げー？　そなの？　じゃあ今からあの星に行こつよ」

「ん……僕はいいよ。ここで見ている方がいい」

「えー、つまんねえよ。」

じゃあさ、次にあの星が近付いたら絶対行こう！」

「次に最接近するのは、確か二百八十四年後」

「うげっ」

気の長い話だなー。

二百八十四年後って——ああダメだ、想像できないや。

「だけど、今夜は運がいい」

「なんでさ？」

「今までで、コレと同じくらいの大きさで見れたのは六万年も前なんだ」

「へえ！ そつちのがもつとスゲー！ オレたち、六万年前と同じ星を見てるのかあ」

ミストは、また空を見ながらコロンと仰向けに転がる。

「さあ、今夜は星を見ながらの休息だ。なかなか風情があるじゃないか」

少し湿った草の匂いが心地よく風にのる。
オレは少し考えた。

「……単なる無一文なだけじゃん」

「なんとも言え」

あ、なんか拗ねたみたいだ。
めずらしー。

「まあ、いつか」

こうやって相棒と、赤い星を眺めながら夜を明かすのも悪くない。

草原の中の、小高い丘の上。

六万年前と同じ赤い星が見れたんだから、二百八十四年後の星だ
って見える気がした。

そのときは、またこの丘でこうやって眺めたいなって、オレは思
う。

帰宅

「なあ、ミスト。こんな辺鄙なトコに何の用事なんだ？」
オレことシエタは、また相棒に付き合っけて寄り道をする。

いつもだったら、さっさと次の街に行って宿をとってるんだけど、
今日はやけに寄り道が多い。

前の街では、服屋に寄ってシヨールを買っていた。

相棒の髪の色と同じ、薄い紫のキレイな絹のシヨール。
縁には同じ色の糸で丁寧な花の刺繍がされていて、これを見たとき、オレは思わず手を伸ばしてた。

オレ、ユーレイだから触れないのにな。

服屋に寄るだけでもビックリなのに、よりによって女モノを買う
なんもんだから二度ビックリだ。

何に使うのか尋ねても何も言わないし。
まあ、そこはいつも通りか。

で、街を出たかと思うと、次の街の方向から直角に逸れて森の中
へ行っちゃうし。

木漏れ日の温かい、緑の茂った豊かな森だなと思う。
たった一本の茶色い線をどんどん進んで、少し広い花畑のそばを
通って、再び木々の茂る道を年季の入ったジープで走る。

あ、ボロツちいとかいうなよ。これはオレが取り憑いてるんだから。

そうやってしばらく走り続けて、広い森の奥、湖のほとりに建つ一軒のログハウスにオレたちはたどり着いた。

「なあ、ミスト。こんな辺鄙なトコに何の用事なんだ？」

「これ、覚えてるか？」

ミストは懷から小さな封筒を出して、オレに差し出す。けど、
「なあ、ミスト。オレがユーレイだってこと忘れてるだろ？」

すかさずかと、手を封筒に通らせながら言った。

相棒は、無言で封をあけ、中の手紙を見せた。

「えー、なにになに？」

『おたんじょうび おめでとう おかあさん』？

……相棒……これ」

オレが相棒と出会ったとき、オレと相棒のそばに落ちてたやつだ。

「この手紙を届けるんだ」

相棒はそう言って、あのシヨールを荷物カバンから取り出す。
まるでプレゼントするみたいにリボンで包まれたシヨール。
そっか、この手紙と一緒に渡すのか。

その相手がこの家にいる。

ようやくオレは、相棒のビックリ行動に納得がいった。
「うっし！ じゃあ早速それを届けようぜ」

オレが急かしたせい、相棒も扉をノックせずに開けた。

「ははっ、ミスト慌てすぎだつて。ノックしなきゃだろ。すいませーん、ごめんくださいーい！」
相棒の代わりにオレが家の人を呼ぶ。

家の中は、なかなかにあたたかな雰囲気だった。

レンガ調の壁に絵画が一つと、隣の部屋へ行く為の扉、部屋の中
央に食卓とイス二つのセット。一番奥には薪が積み上げられ、隣に
暖炉があり、暖炉の上に写真立てがあった。

「誰もいないのかな？ …… って、相棒！？」

相棒のやつ、まるで自分の家みたいにずかずか中に入っ
ていつちまった。

まるで最初から何するか知ってるみたいに隣の部屋に入
ってく。

そこは子供部屋だった。

一発でわかるさ。人形とかぬいぐるみとか、おもちゃが
いっぱいだし、子供の描いた絵が壁にいっぱいあるし。

「あ」

小さな木のベッドに、誰がいる。

子供のお母さんかな。そんな格好だ。

相棒は、その人の隣に手紙とショールを置いた。

「――」

何て言っただらう。声が小さくて、相棒の言葉が聞き取れな
かった。

そのまま、相棒は軽く礼をして足早に家を出る。

相棒に、何て言ったのか訊きたかったけれど、オレは相棒についていくのがやっとだった。

青かった空は、いつの間にか山の端から夜の色に染まりつつあって、赤く優しくオレたちを照らしている。

赤い空。

突然、何か思い出したような気がして、オレは家を振り返る。

茜色に染まった世界の中で、子供が母親らしい女の人の手を引いて、嬉しそうに森へ歩いて行くのが見えた。

いや、たぶん幻だ。

その子供が、オレのようにも、ミストのようにも見えたから。

理由はわからないけどさ、なんだか嬉しくなって、いつの間にかオレ、笑ってた。

「……待てよ、相棒！」

オレは先を歩くミストのあとを追いかけた。

幸せそうに、母親と歩く子供とは逆の方向へ――。

景色の中

その旅人は男だった。

搭乗制限二人の小さなジープを運転していた。

黄土色の荒野に挟まれた、ジリジリと熱いアスファルトの上をたつた一台で走り抜ける。

『ねえ』

少年の高い声が呼びかける。

運転手は返事もせず、振り向きもせず、ただ前だけを見て運転していた。

『暑いんじゃないか？ 顔中汗だらけだぞ』

運転手を心配している声だった。しかし、運転手はやはり何も言わず車を走らせる。

いつの間にか風景が変わり、殺風景からにぎやかな緑の森へと景色は流れる。

そよそよと涼しげに葉をこする木々の中を、無機質な路が敷かれ、その上を白い車がスピードを出したまま通る。

車の中からの外の景色は、ただ緑が後へ後へと流れていくだけだった。

ここでやっと、運転手は両側の窓を少し開ける。

バタバタと風の入る音に混じり、蝉の鳴き声が流れては消える。

雑音が大量に侵入し、聞いていたラジオの、明日からの天気が変わらなくなった。

『？ なんでクーラーつけないのさ？』

少年の声が訝しげに訊ねる。運転手右側には、確かにクーラーのスイッチと温度調節のツマミが存在する。

運転手は露骨にムツとした顔になる。

「昨日からだろ」

声は、運転手の返答にしばらく黙る。

『あつ、そーか！ 壊れてたんだ』

正しくは、昨日の昼過ぎからだった。

「暑そうだなあ……」

クーラーのおかげで、ヒンヤリ快適な旅をしていた男は、太陽に照らされる町の建物とそこに住む人々を眺めた。

締め切った窓の内と外の差は片手を広げたほど。それだけでこんなに気分も感覚も違う。

外気に影響を受けたのか、男はさらに一、二度温度を下げる。が、

グキユルルン……ガキョ……カチカチカチカチ……ン

それ以降、クーラーは何度スイッチを押しても、機嫌が悪いかのようになんか言っただけ言っただけ黙る、ということ繰り返している。

今日も、もしかしたら運良く直っているのかもとスイッチを押すが、ウンともスンとも言わない。

『ここで一旦休憩してクーラー直さないの？』

少年の提案に、男は汗だらけの顔を服の袖で拭いた。

「ここはよく追い剥ぎが出る」

『ふんふん』

声は相槌を打つ。

「止まったら最後、涼しいどころか懷も身包みも寒くなってしまっ
『ナルホド』」

さして感心してなさそうな声で応える少年。

男の運転するジープはギアを変えて、一気に加速した。

「さあ、次の街まで急いで行こう」

『その街に腕のいい機技師がいるといいね』

声は楽しそうに言ったあと、何も喋らなくなった。

まるで、最初からいなかったかのように。

旅人はひとりで、車で旅を続けた。

ある蒸し暑い日の事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9102a/>

ミストとシェタ

2010年10月10日23時29分発行